基調報告

韓国の技術士の皆さん、この度の日韓技術士会議の為、わざわざ沖縄までお出かけ下さいまして厚く御礼申し上げます。日本の技術士の皆さんも全国各地からお集りいただき感謝申上げます。沖縄の抜けるような青い空と海に大歓迎され、皆様のおかげで第３６回日韓技術士会議も盛大に催すことが出来ました。

さて、日本の委員会は、毎年開かれるこの大会を実り多きものにするためと、日韓間における経済や、産業構造調査研究をかねて、毎月委員会を開いてきました。また、その間に、韓国との合同委員会会議も開催しており、今年は日本、韓国で一回づつ開催いたしました。合同会議では、この度の会議の共通テーマ「社会開発における技術士の役割」を決定したり、CPD や技術者の倫理、そして最近話題のＦＴＡなどに関わる問題について、技術士として民間の立場から考え方などについて協議し、一致するものもあり平行線を辿るものもありますが、結果として有意義なものとなりました。

ここでこの会議についての経過を申し上げます。１９７１年に、韓国で第１回日韓技術士会議が開催され、今年で３６年が経ちました。この歴史を見ますと、第１回の合同会議では友好親善を主とした内容でしたが、次の年東京において、会議で覚書の具体的な協議がなされ、両国技術士法の比較研究も行われました。その後、技術移転や産業安全に力が注がれるようになりました。１９８７年の第１７回会議において、日韓産業構造に関する共同研究が提案され、第１８回以降、技術士制度や日韓産業構造に関する調査研究が取り上げられ、国際会議として成熟期に入りました。１９９２年からは日韓両国の首都以外の地方都市開催となったのです。新潟市での第２２回ではじめて分科会形式がとられ、次回からは４分科会が常設され、ほぼ現在の姿となったのです。

地方都市での開催は新潟、札幌、松江、千葉、福岡、仙台、米子、そして今年の那覇と続いてきました。韓国についても、大田、慶州、牙山、釜山、済州、東草、全州で開かれました。参加者の数は、初めは両国合わせて２０名から３０名で試行錯誤を重ねてきましたが、今や数百人の規模となっており、それだけこの会議に両国の技術士の関心と熱意が高まってきたことを示しているのです。

この種の会議は技術交流が第一の目的であり、それが全てといって良いと思いますが、根底には相互理解と友好親善が基礎になっていることはここで改めて述べるまでもありません。これからはそれに留まらず、さらに一歩進めて真の相互補完の時代が必ずやってくるものと思います。日本から見て最も近い隣国であり、そこでは最も強

い絆で結ばれて当然なのですが、どうしても避けて通れない障害もいくつかありますが、私共技術士はそれを乗越えて３６年間の交流を続けてきたのであります。

話は変わりますが、１９９６年、日韓技術士合同調査団（日本 中山輝也団長、韓国許填団長）で北朝鮮を訪れ、技術協力の可能性について視察しました。その北朝鮮では今回核地下実験が行われ、日韓両国、世界をも震撼させました。軍事的非核保有を誇りとする日韓両国にとって座視するわけにはいかない問題です。韓国では、同一民族という融和的な考え方も若干あるように聞きますが、直接脅威となるのは日韓両国です。核が拡散された際の危惧は想像に難くないと思います。国際協調の時代に冷水を浴びせる、許しがたい行動です。科学技術は全人類の幸せのためにあり、これを悪用することについて技術士の立場からも徹底的に対処すべきものと思います。

つい先日、間もなく政令都市となる私の住む新潟市と、広域都市である蔚山市との交流協定の調印式で韓国の総領事さんが私を慮ってかもしれませんが、盛んに日韓技術士会議をＰＲしておられました。「長い歴史を持ち、技術協力実績を築き上げ、さらに両国の地方都市を紹介しあっている」と蔚山市長さんはうなずいていました。見知らぬ土地を訪れ、お互いに交流しあうことは大切なことだと思います。

最後になりますが、日本最南端の那覇市での会議では、沖縄県の地域特性を取り入れたつもりです。また、比較的少数の沖縄県の技術士の皆さんが私共と密に連絡しながら、一年以上かけて韓国の皆さんを歓迎するため頑張ってくださいました。これを契機に、沖縄県の技術士もさらに全国へはばたく機会を持つきっかけになると思います。ここで沖縄県の技術士の皆さんに改めて御礼申し上げ、基調報告を締めくくらせていただきます。ありがとうございました。

２００６年１１月１３日
社団法人日本技術士会
日韓技術士会議実行委員長　中山輝也